

令和5年度 会派調査研究報告書

(視察先1箇所につき1枚)

会 派 名	壮志会
事 業 名	先進地視察 埼玉県行田市 日本遺産に関する取組について
事 業 区 分	①研究研修 ②調 査

1 上田市での課題と研修・調査の目的

上田市は令和2年に日本遺産「レイラインがつなぐ太陽と大地の聖地～龍と生きるまち信州上田・塩田平」として93番目に認定されました。認定から4年目を迎え基盤整備期間を終了し、自立・自走期となった。更に1年が過ぎ様々な課題が現出する中、課題解決を進めていく組織体制を必要としている。こうしたことを踏まえ先進地である行田市の取り組みを参考に課題の解決に資する。

2 実施概要

実施日時	視察先	埼玉県行田市
令和6年1月24日(水) 午前10時～午前11時30分	担当部局	教育委員会文化財保護課
報 告 内 容	<p>1 市の概要 行田市は埼玉県の北部に位置し、利根川を境に群馬県と接する。ほぼ全域が利根川沖積平野であり、土地の高低差がほとんどなく平らな地形である。市全体の海拔は20m前後であり、最高地点でもさきたま古墳公園で海拔36mである。熊谷市との市境付近に全国でも珍しい複数の飛び地がある。</p> <p>2 市の特徴 行田市大字埼玉（さきたま）は古くは「万葉集」に「さきたまの津」という記述があり、「風土記」にも「武蔵野国埼玉郡（さきたまごおり）」とあるように「埼玉県」地名の発祥の地である。古墳時代には稲荷山古墳など造成され、金文字が入った金錯銘鉄剣など貴重な文化財が出土している。 室町時代には忍城（おしじょう）が築かれ、成田氏を中心とする武士団の本拠地として周辺に勢力を拡大していた。戦国時代には後北条氏と結んだため、豊臣秀吉の小田原征伐の際に石田三成の攻撃を受けることとなる。 江戸時代には忍藩領となり、阿部氏、後に松平氏の城下町となる。石高は十万石。江戸時代中期より、下級武士の内職として足袋の生産が始まり、明治時代を迎えて機械化され、行田足袋として一大産地となった。最盛期の1938年には約8500万足の足袋を生産し、全国のシェアの約8割を占めた。 第二次世界大戦後の日本では洋装化が進み、足袋産業は衰退した。 文政6年（1823年）に陸奥国白河藩主松平定永を伊勢国桑名へ、桑名藩主松平忠堯を武蔵野国忍へ忍藩主阿部正権を白河へ転封した三方領知替えから今年で200年となる。 忍城は映画「のぼうの城」（2012年上映）、テレビドラマ「陸王」（2017年放送）の舞台となり、多くの観光客が訪れた。</p>	

3 視察事項について

「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」

- ・平成 29 年 41 番目に認定。埼玉県内では初めての認定
- ・再審査を受けての課題解決に向けて

①日本遺産に認定された内容

- ・行田の足袋の始まりは 300 年前。武士の妻たちの内職であった行田足袋は、やがて広く知れ渡り、最盛期には全国の約 8 割の足袋を生産するまでに発展した。それと共に明治時代後半から足袋蔵が次々と建てられ、忍城の城主が推奨したこともあり、関東で一番の足袋の産地となった。更に、明治以降に足袋が大量生産され、ストックしておくために町中に蔵が建ち始め「足袋の町」「蔵の町」となった。
- ・食文化については、女工さんが仕事の合間に食べていた、お好み焼きに似た「フライ」、コロケに似た「ゼリーフライ」、お茶うけ、お土産にもなった「奈良漬」。
- ・近年「ものづくり大学」ができ、学生の意見でまちづくりが始まった。ものづくり大学、芝浦工業大学、日本工業大学、足利工業大学の 4 大学の学生に町を歩き意見を聞いたが、4 大学生が声を合わせたように、足袋産業を残した街づくりが提案された。そこから、あいている蔵を再利用して NPO を立ち上げ、まちづくりプロジェクトが始まった。市が、公共的に活動するイベントスペースとしてふるさとづくり事業として行うことを条件として、2000 万円の 100% の補助で蔵を修復したが、運営費の補助はなく運営している。
- ・このような経過で日本遺産の認定を目指した。

②認定における最大のメリット

- ・埼玉県での認定は一つということもあり、様々なところで宣伝を行い、まちづくりの機運が高まった
- ・文化保存の観点から見ても、文化財の指定を受けないと保存事業は難しく、反面文化財の指定を受けてしまうと、指定後の管理が厳しくなることで、所有者が指定を受けがらなかった。日本遺産の認定によって、管理の規制が緩いため、構成文化財に入ることに了承頂き、蔵の文化を守ることができた。足袋業者も認定されたことを喜び市民にとって「行田の足袋」は日本の代表する産業として再認識した。
- ・従来の観光地ではなく周知は難しいが、埼玉県が主に観光地としているところが、川越と秩父だけであるため、県としてバックアップしている。
- ・認定後、行田市の日本遺産協議会が設立して補助金を頂き様々な事業を展開した。主に、インフルエンサーを呼んで蔵の宣伝をしたり、各所にブースを作ったりパンフを各戸に配布して市民の認定の周知に力を入れ、ガイドブックを売ったり、駅前に大きな看板を作成したり、テレビ局にお願いして PR 動画を作成した。しかし、日本遺産関連事業は地方の活性の事業でありながら、中央の大手が担ってしまう。なるべく地元業者に発注したが、やはり都心への宣伝は弱くなってしまふ。

③地域や自治会単位の協力や市職員の協力体制

- ・自治会単位での協力は無いが、花手水を開催している神社周辺の自治会に協力頂いている。
- ・行政は支援するが、アイデアは民間でお願いすることがよいと思う。日本遺産については行政主体となりお願いすることが多い。

* 視察先の写真等がある場合は添付のこと

④今後の課題等について

- ・映画、ドラマの舞台となったこと及び、日本遺産認定が重なったことで観光客は一時的には増えたが、その後、右肩下がりで見込客が減少したことで再審査の際にはマイナスになったと説明があった。
- ・後継者の育成は、現在残っている市内の足袋業者は 10 社のみで、各工場では職人の高齢化が進み、その中でも後継者がいるところは少なく、そのため、今まで分散していた工程を 1 人でできるように伝えている
- ・行田の日本遺産は足袋蔵もあるが、構成文化財の「忍城」「埼玉古墳群」からの観光客の回遊策として取り組みを行っている。
- ・行政主体ではなく、民間主体でのアイデアによって活動することが望ましく、観光キーマンを決め、日本遺産をまちづくりに生かした市民と観光客が集える場所を作っている。
- ・今後、日本遺産を観光事業として誘客する計画では、外国人目線で丁寧に、日本人でも分かり易く理解してもらえるようにしている。足袋屋もグローバル化としてカラフルな足袋を作成して国際化を図っている。
- ・日本遺産認定後、スローペースではあるが、個人所有の蔵をお借りして、パン屋やカフェを開業している。足袋蔵は殆どが個人所有のため開いているところが少なく、観光のツールとしては難しく、再審査の時にも指摘された点であった。

4 まとめ

- ・評価で大事なものは、実績よりも再認定後の 3 年間の計画。
- ・上田も日本遺産の構成文化財に登録されていない上田城や菅平等から日本遺産の PR を行う事で、観光客として誘致するプランを作ることが重要となる。
- ・二次元コードを使い、詳細な説明やドローンを使った見ることのできない景色などを見れるようにしたり、体感できるようにしていくと効果的である。
- ・文化庁では、インバウンドを中心とした観光振興施策として舵を切っているため外国人目線の計画が必要となっている
- ・観光客に対して、地域住民が「うちの市には何もない」と答えることは、せっかく観光に来られている方に大変失礼なこと、日本遺産に認定されていることはオンリーワン、ナンバーワンであり、認定された魅力を地域住民が再認識して周知することが求められている。
- ・行政が主導ではなく、民間が主体となっており、行政と民間連携が大事となる。補助金主体で考えず活動し、後から補助金が付くような活動が一番望ましいとの事であった。
- ・観光客だけでなく、市民が幸せに暮らせてこそその観光であり、市民が楽しい街であるから、来る人も楽しめるまちを目指し取り組んでいきたいと考える。

